

仏教壮年の声



毎年8月に1000個のろうそくで境内を彩る「法燈会」は門信徒会が担当。観光客や市民が多数訪れる



門信徒会の歌「同朋の桜」を歌う会員

奈良・浄教寺門信徒会（仏壮）

本堂再建で
門信徒が結集
聞法続けて
半世紀

今号からスタートする「仏教壮年の声」。仏教壮年会連盟のホームページで紹介されている「仏教壮年の声」と同様に、全国から仏壮にちなんださまざまな「声」を掲載していきます。第1回は奈良市の浄教寺門信徒会。「仏教壮年会」という言葉がまだ普及していなかった頃に結成され、半世紀近い歴史を持っています。

浄教寺は1936（昭和11）年に本堂を焼失。再建工事が進められましたが、戦中戦後の混乱もあり、落成記念法要をつとめたのは32年後の1968年でした。この間、本堂再建に向けた門徒組織が、自然なかたちでつくられていきました。そこで「本堂落成を機に解散するのはもったいない。聞法につなげてゆかねば…」と翌69年、仏教婦人会と並ぶ、男性による「浄教寺門信徒会」が結成されました。

主な活動は、聞法とお寺の護持運営や法要行事への協力です。浄教寺の数多い法要行事の中でも、とくに新年会と永代経法要、そして報恩講のときは、門信徒会を中心とした法座が設けられています。さらに毎年、聞法のための研修ツアーを実施、隔年で1泊研修を行っています。

近年の新たな活動としては、毎年8月に行う「法燈会」が好評を博します。お寺の境内を1000個のろうそくの灯りで彩り、大勢の観光客や市民が訪れています。この法燈会の発案から企画、準備、デザインまで、すべて門信徒会が行っています。

島田春樹住職は「お寺の活動になくてはならない存在が門信徒会のみならず、率先してお手伝いいただくだけでなく、護持運営にもいつも心を砕いてもらっています」と目を細めます。

門信徒会の寫田達也会長は「昨年は本堂の平成大修復と親鸞聖人750回大遠忌のご法要を盛大におつとめできました。みなさん本当に協力的で文句一つ出ません。これを機に、子や孫たちにみ教えが伝えられるよう、さらに尽力させていただきます」と話します。